

# <書評>張立波『「国家」と「国民」の文学世界』 井上ひさし

著者	王 成
雑誌名	日本研究
巻	59
ページ	123-127
発行年	2019-10-10
その他の言語のタイトル	?立波『?国家?与?国民? 井上厦的文学世界』
URL	<a href="http://doi.org/10.15055/00007328">http://doi.org/10.15055/00007328</a>

張立波

## 『「国家」と「国民」——井上ひさしの文学世界』

張立波『「国家」と「国民」——井上厦的文学世界』

王成



上海社会科学院出版社，2014年

私の個人的な記憶から語ることを許されたい。はじめて井上ひさしという作家の存在を知ったのは一九八六年北京日本学研究中心ターの春学期だったと記憶している。当時師事していた日本文学研究者の前田愛先生から、「君、日本文学や日本語を理解するには、井上ひさしの作品を読んでおいた方がよい」と云われたことがある。実は、その前年、中国で創刊して間もなかった『日本文学』雑誌における井上ひさし特集を読んでいたのである。同誌の特集には、「悪魔」や「笛吹峠の話売り」など短篇小説六編の翻訳と「井上ひさしとその小説の世界」という評論が掲載されていた。その特集は中国における最初の井上ひさし研究だといえる。自分も当時、井上ひさしを研究対象にしようと考えていたのだ。そして日本での短期留学中にはせつせと井上さんの作品を集めたもの

だが、方言や語呂合わせ、駄洒落などをふんだんに使い、言葉遊びのような文体を用いて日本文化の土着性と現代性を表現したその作品を読み込むということは、大変骨が折れる作業であった。結局、私なりの井上ひさし論が書けなかったのである。この度、著者の『「国家」と「国民」——井上厦的文学世界』（『「国家」と「国民」——井上ひさしの文学世界』）を読んで、あらためて、自分が井上ひさしの文学作品を読んだ当時の記憶が呼び起こされた。『シャンハイムーン』の中国語翻訳から井上ひさしの文学に近づいた張立波さんが『「国家」と「国民」——井上厦的文学世界』を刊行したことは、中国の井上ひさし研究において画期的な出来事だと思われる。日本で広く読まれている井上ひさしの文学は、中国ではあまり知られていないからである。

本書は中国語で書かれた博士論文に修正を加え、出版したものである。その構成は「序章」、「第一章 国家戦争体制下の〈非国民〉——『シャンハイムーン』」、「第二章 天皇制国家体制の暴露と批判——『組曲虐殺』」、「第三章 井上ひさし国家観の集大成——『吉里吉里人』における理想国家」、「第四章 井上ひさしの宇宙観——『きらめく星座』」、「第五章 井上国家観の源とその表現」、「結び」から成っている。

中国語のタイトルをそのまま日本語に翻訳すれば、『「国家」と「国民」——井上ひさしの文学世界』となるが、本書に序文を寄せた井上ユリ夫人はそのタイトルを日本語で『井上ひさし論——国家と国民』と表記している。日本語と中国語のタイトルを比べると、両者の間には微妙なニュアンスの違いがあることがわかる。井上ユリ夫人は国家と国民から鉤括弧を外しており、また「井上ひさしの作家活動をつらぬく太い柱は、人々がどう共同して、より人間らしい集団・社会を作っているのか、であります。張さんは『国家と国民』と題して、まさにここに注目し、論考を深めてくださいました。」(二頁)という指摘では、「国家と国民」という言葉を使わずに「人間らしい集団・社会をつくる」という表現を使っているのは興味深い。

本書には、国家観とは何かという問題意識から作品分析を通して井上ひさしの「国家観」を浮き彫りにしながら各作品の思想を論

じつつ、また作家の人間形成をたどることによってその国家観の源流を考察するという全体的な構想が見られる。

序章では、本書の問題提起が書かれている。井上文学は現代日本の美学、文化、社会、政治、経済、日常生活などに広くかかわっているから、日本の現代文学を語るとき、避けて通れないと認識した。そこで、本書でまとめられた井上文学の研究は、「個別の作品論ではなくより広い視野で井上文学を全体的に捉えるべきだ」(二六頁)という捉え方で、井上ひさしの作家活動をつらぬく太い柱を見出そうとしている。その太い柱に井上ひさしの文学における「国家観」を見出した著者は、日本人が戦争をどう捉えるべきか、敗戦をどう受け止めるべきか、日本という国家にどう向かうべきか、という問題について、井上ひさしが生涯取り組んだ文学のテーマだったことを改めて認識している。つまり、井上ひさしは「この国のかたち」をつねに文学を通して問い続けてきたのである。

著者は「国家観」という概念について、つぎのように定義している。国家観とは、個人が国家の役割や国家と個人の関係に対する見方、考え方などといった主観的なものを指す。古典的自由主義の根本思想においては、国家の権力より個人の権利が優先される。古典的自由主義者にとって重要なのは、憲法の形で個人の自由と財産を保護し、国家に侵犯させないことである。著者の解釈

によれば、いわゆる古典的自由主義の論理に基づき、国家と個人の関係について二つのパターンを提示している。一つは『吉里吉里人』に登場した富を擱んだ農民たちのように、国家の農業政策による農業や農民への影響について理解しようともせず、農業政策による物質的満足に安住して、無自覚的に国家政策の協力者となるパターンである。もう一つは個人の権利から国家及びその政策に疑問を持つ人びとである。本書において筆者は、井上ひさしが国家機構や国家政策、または個人と国家の関係について考えたことがその作品を通して井上ひさしの「国家観」として表現されていると考えている。

また、戯曲『シャンハイムーン』を中国語の『上海月亮』（広西師範大学出版社、二〇一二年）に翻訳した著者はユニークな作品論を展開している。一般的に、「シャンハイムーン」はアジアを代表する世界的文学者魯迅の生涯を描く井上ひさしの評伝劇の最高峰だと言われているが、著者はそれを「非国民」の群像を描いた力作として解釈している。登場人物の須藤五百三、魯迅、内山完造を「国家体制を飛び出す〈非国民〉」像や「国家体制に對抗する〈非国民〉」像や「国家体制を利用する〈非国民〉」像に分類しながら議論を展開している。井上ひさしはそのような「非国民」像を描くことによって、国家体制が完全に信頼できるものではなく、国民の一人ひとりが個性を守り、国家と対抗することを表現して

いるとみなしている。

しかし、上海を舞台にした戯曲『シャンハイムーン』を「非国民」の群像として論じた箇所は、やや手薄なところがあるようにも感じられる。井上ひさしは、上海を舞台にすることによって、近代日本も含めた帝国主義の侵略の歴史を認識しながら、国境を越えて、上海の内山書店に集まった魯迅や内山完造や須藤五百三という人びとのつながりを発見した。つまり、井上ひさしは戯曲『シャンハイムーン』を通して、「非国民」というより国家の枠組みを超えた人間同士の国際的な連携の空間を構築したと読み取れるのではないのだろうか。たとえば、董炳月の「井上厦的『反魯迅』——『上海月亮』的喜劇芸術与意義結構」（井上ひさしの〈反魯迅〉——『シャンハイムーン』における喜劇芸術と意味構造）で、井上の構築した「内山書店」という空間が「魯迅の蒋介石政府に抵抗する空間である一方、内山や須藤たちが天皇制に抵抗する空間でもある。そこは、近代国家に抵抗する空間が構築され、人間と人間が対面する空間となった。井上ひさしはその空間で魯迅と日本人の友情の中にある国家を超えた価値と普遍性という倫理道徳を発見した」という一面を指摘しているが、著者の論と関連させて読むこともできる。

「非国民」という言葉は中国語には存在しないが、著者は日本語漢字概念としてそのまま中国語の文章に使っている。その日本語

の概念は国民としての義務を忘れた者や国家に叛いた人を指すが、特に第二次世界大戦の前や戦中において、軍や国の政策に批判的で、非協力的なものを貶めていった言葉である。独立した個性を持ち、戦前、戦中の軍国主義的な国家体制に対抗して、「非国民」になることは危険を伴うことだった。小林多喜二のように、特高警察に代表される国家との戦いによって、正義を堅持し、その勇氣ある人間性を示した「非国民」は井上ひさしが讃える国民像でもある。著者は、警察によつて虐殺された小林多喜二を描いた戯曲『組曲虐殺』を井上ひさしの社会活動、特に「九条の会」の呼びかけ人と関連させて論じている。なかでも、井上ひさしの父親である井上修吉が戦前、プロレタリア文学の雑誌を自分の薬局で販売しただけで、警察に三回逮捕され、拷問を受けたため、病気を患つて三十四歳の若さでなくなつた、という作家論的な背景説明を取り入れながら、小林多喜二の拷問死と父親の拷問を受けた病死をパラレルに論じた。本書では戯曲『組曲虐殺』から、個人の尊厳が守れない天皇制国家を批判した井上ひさしの現代社会へのメッセージを読み取るという著者のスタンスも示されている。

弱者の側に立つて権力を批判してきた井上ひさしを日本プロレタリア文学の継承者と見なす丸谷才一の説を無批判に受け入れた著者は、小林多喜二をパロディ化した『組曲虐殺』をプロレタリア文学の系譜に入れて論じようとする。しかし、日本にもプロレ

タリア文学研究の蓄積があるし、中国にも小林多喜二の受容史がある。井上ひさしがどのように日本プロレタリア文学の継承者になつたかについて、本書は実証的な論証をせずに、桐原良光の『井上ひさし伝』を参考にただけで、井上ひさしがなぜプロレタリア文学としての『組曲虐殺』を書いたのか、その理由を論じようとした。それより、『組曲虐殺』がどう書かれたのかという問題について論考を深めるべきだと思われる。

「昭和庶民伝」として書かれた『きらめく星座——昭和オデオン堂物語』を論じた本書の第五章では、井上ひさしの宇宙観に焦点を当てたところが面白かつた。「私小説」に因んだ「私戯曲」という作品は、太平洋戦争前夜の軍国主義一色の時代に巻き込まれながらも「きらめく星座」のような昭和オデオン堂一家の物語を井上ひさしの家に基づいて描いたのである。宇宙の広大ささええば戦争を起こす人類が愚かなものだ表現した井上ひさしの反戦思想に注目する著者は、宇宙、地球、人間という三位一体の宇宙観を戦争時代の「大日本帝国」観を超えるものとして、「天人合一」にまで昇華させた。

「国民」と「非国民」という概念によつて、昭和戦前、戦中の歴史を描いた『シャンハイムーン』、『組曲虐殺』、『きらめく星座』という戯曲を分析しながら、井上ひさしの「国家観」をまとめた著者は、戦後の歴史を描いた『吉里吉里人』という長編小説を分

析することによって、井上ひさしの「理想国家」観も論じている。「理想国家」における立国の本」や「理想国家」における戦力の本——医療保障」、「理想国家」における農業モデル」という見出しから見て、著者の論じ方は、作品に織り込まれている作者井上ひさしの思想を読み取るものである。日本から独立した「吉里吉里国」をユートピアとして描いた井上ひさしの国家構想は、「憲法九条」を守ることや文化立国や医療立国や農業立国などを含めたものである。それは日本という国家とまったく違った国家の構想だと指摘している。

一方、井上文学における現代日本の文明批評を論考した本書は、国民作家としての井上ひさしのイメージ作りに走りすぎたという誇りを免れない。作品の内容分析によって、作家の「国家観」を考察するやり方も作者の仕掛けた落とし穴にはまりやすい。例えば、『しみじみ日本・乃木大将』（新潮社、一九八四年）の作品論を取り入れることによって、井上ひさしが暴き出した近代日本の国家の本質とは、劇中の天皇が「われわれの、この明治という時代は、さまざまな場所で、さまざまな人々が、忠臣や篤農や、節婦や孝子などの型を演じ、その型を完成させ、周囲の手本たらんとつとめる時代なのだ。国民に型を示し、そのうちのひとつを選ばせる。これが国家というものの仕事なのだ。」（新潮文庫、一二〇頁）と語っているように、国民に「忠臣、孝子」の型を押し付け

るものである。この天皇国家という近代日本の本質を暴く井上ひさしの国家認識については、本書では論じられていない。

博士論文として書かれた本書には丁寧な年譜が付けられており、作家論的な展開も見せているが、方法論として解釈学とマルクスを使い、実証研究をあえてしないと明言しているが、そのぶん論考が手薄となってしまうことは否定できない。また、日本語論まで発表して近代国家の形成と言語問題を生涯に問い続けてきた、言葉の魔術師のような井上ひさしを論じるのに、戯曲や小説におけるジャンルや言葉の問題を配慮せずに、作品の表現をそのまま作家に還元する解釈の仕方には無理がある。また著者が井上ひさしと親交があつたことを考えると、論考の中に、井上ひさしの「国家」について語ったインタビューや対談など作家をめぐる資料を取り入れなかったのも、やはり本書における手落ちだと思われる。